

# 持続性の高い農業生産方式の導入に関する指針

制定	平成 12 年 3 月 1 日	農営第 721 号
改正	平成 17 年 3 月 14 日	農営第 729 号
改正	平成 18 年 12 月 1 日	農営第 544 号
改正	平成 19 年 3 月 30 日	農営第 727 号
改正	平成 20 年 2 月 1 日	農営第 601 号
改正	平成 21 年 3 月 5 日	農営第 683 号
改正	平成 22 年 3 月 2 日	農営第 685 号
改正	平成 23 年 2 月 22 日	農産第 1035 号
改正	平成 24 年 3 月 1 日	農産第 1158 号
改正	平成 25 年 2 月 26 日	農産第 1098 号
改正	平成 26 年 2 月 13 日	農産第 1118 号
改正	平成 27 年 2 月 25 日	農産第 1136 号
改正	平成 29 年 2 月 8 日	農産第 1040 号
改正	令和 3 年 2 月 8 日	農産第 1093 号
改正	令和 4 年 3 月 22 日	農産第 1186 号
改正	令和 5 年 3 月 24 日	農産第 1340 号
改正	令和 5 年 10 月 24 日	農産第 828 号

「持続性の高い農業生産方式の導入に関する指針」を次のとおり定める。

## 第1 導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容については、県内を、岡山平野、吉備高原、津山盆地、中国山地の4区域に区分し、各農作物について、その適応区域を定める。

なお、各区域の自然的条件は次のとおりで、これら自然的条件をもとに、市町村の境界を優先して別図のとおりとする。

自然的条件	岡山平野	吉備高原	津山盆地	中国山地
(1) 地形	平坦地	丘陵、台地	平坦地	高原、山麓
(2) 標高	100m未満	200m～500m	100m～200m	500m以上

(3)年平均気温	14℃以上	12～13℃	13～14℃	13℃未満
(4)年降水量	1,300mm未満	1,300mm ～1,500mm	1,300mm ～1,700mm	1,700mm以上

各農作物における持続性の高い農業生産方式の導入にあたって、共通事項として次の点に留意すること。

(1) 有機質資材施用技術

たい肥等の有機質資材の投入にあたっては、土壌診断に基づいて、土づくりの目的に合致した資材を選択する。

たい肥はその原料によって、含まれる肥料成分の含有量が異なる。このため、たい肥の多量施用もしくは連用は、特定成分の過剰蓄積や塩基バランスの崩壊の恐れがある。土壌診断に基づいて足りない成分を補うようなたい肥を選択する。

(2) 化学肥料低減技術

農作物ごとに記載された低減技術の手法が複数ある場合、可能なものについては、それらを組み合わせて、化学肥料の低減を図る。

たい肥の施用によって持ち込まれる肥料成分については、化学肥料等の施肥量からこれを減ずる。

(3) 化学農薬低減技術

気象条件や病害虫等の発生に対応して、ここで掲げた技術以外の耕種的手法等を組み合わせて、化学農薬の低減を図る。

農作物ごとに記載された低減技術の手法が複数ある場合、それらを組み合わせて、できるだけ化学農薬の低減に結びつけることに留意する。

また、生物農薬利用技術やフェロモン剤利用技術については、病害虫の発生前や発生初期の使用を前提とし、処理時期等に留意する。

第2 持続性の高い農業生産方式の導入の促進を図るための措置に関する事項

たい肥等の有機質資材の適切な施用を行うためには、資材の成分含有量の把

握や土壌の性質について定期的な診断が必要となる。

また、化学的に合成された肥料の低減を図るための局所施肥技術や、肥効調節型肥料及び有機質肥料の施用技術の導入にあたっては、土壌、気象、栽培条件等によって、その肥効発現等が異なることから、地域条件に適合した施肥設計が重要である。

このため、農業普及指導センター及び農協の営農指導組織等の相互の連携の下、土壌診断等の実施並びに土づくりや肥料等に関する情報を提供する体制を強化する。

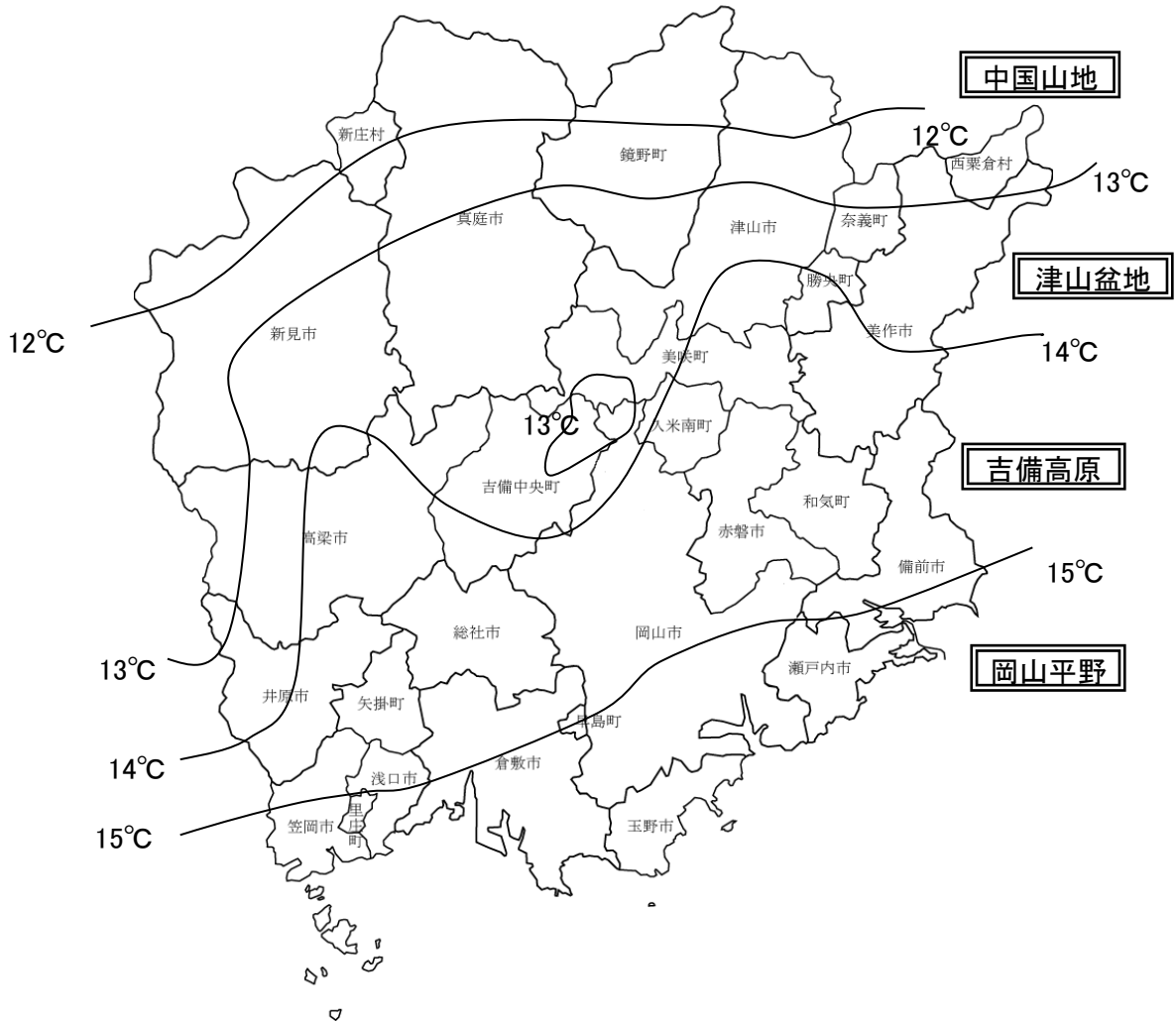
また、優良な有機質資材を確保するためのシステムづくりや条件整備を積極的に推進する。

化学農薬を低減した病虫害防除においては、きめ細かな発生予察情報の提供が一層重要となる。このため、病虫害防除所を中心に農業普及指導センターや営農指導員等の連携の下、各地域におけるより細かな発生予察の実施や防除技術に関する情報を提供できる体制を強化する。また、天敵やフェロモン剤等を利用する化学農薬低減技術については、その効果を最大限に発揮させるため防除技術の開発と普及に努める。

※別表参考欄の慣行レベルとは、特別栽培農産物に係る表示ガイドラインの慣行レベルを基本としている。

(別図)

# 岡山県区域図



(別表)

## 1 水稻

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・早生 20%以上低減 ・中生・晩生(移植) 30%以上低減 ・中生・晩生(直播) 20%以上低減 ・有機質肥料施用 ・酒造好適品種 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・早生品種 9(コシカリ 7) ・中生・晩生(移植) 10 (ヒビカリ 12) ・中生・晩生(直播) 10 (ヒビカリ 12) ・酒造好適品種 6
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	温湯種子消毒	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・早生 30%以上低減 ・中生・晩生(移植) 30%以上低減 ・中生・晩生(直播) 15%以上低減 ・酒造好適品種 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・早生品種 18 ・中生・晩生(移植) 18 ・中生・晩生(直播) 20 ・酒造好適品種 18
	機械除草		
	除草用動物利用		
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	マルチ栽培		

## 2 麦類

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 5%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 12
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	温湯種子消毒技術	化学合成農薬成分回数 慣行比 10%以上低減	化学合成農薬成分回数 8
	機械除草		

### 3 大豆(黒大豆を含む)

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・大豆(黒大豆を除く) 25%以上低減 ・黒大豆 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・大豆(黒大豆を除く) 2 ・黒大豆 3
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・共通 12
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

### 4 小豆

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 4
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 25%以上低減	化学合成農薬成分回数 7
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

## 5 そば

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 4
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 50%以上低減	化学合成農薬成分回数 2
	生物農薬利用		
	フェロモン剤利用		

## 6 茶

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 64
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 15%以上低減	化学合成農薬成分回数 12
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	フェロモン剤利用		

## 7 飼料用米

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 25%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・食用品種 10 ・専用品種 18
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	温湯種子消毒	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 20%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・共通 15
	機械除草		
	除草用動物利用		
	土壌還元消毒		
	マルチ栽培		

## 8 WCS用イネ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 25%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・食用品種 10 ・専用品種 18
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	温湯種子消毒	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 20%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・共通 13
	機械除草		
	除草用動物利用		
	土壌還元消毒		
	マルチ栽培		



# 9 いぐさ

区域名 岡山平野

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 25%以上減低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 51.5
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	土壌還元消毒	化学合成農薬成分回数 慣行比 10%以上減低減	化学合成農薬成分回数 14
	マルチ栽培		

## 10 ささげ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 4
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 25%以上低減	化学合成農薬成分回数 9
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

## 11 こんにやく

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 15
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 11
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
マルチ栽培			

## 12 もも

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・露地 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 早生 4 中生 4 晩生 4
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・露地 10%以上低減	化学合成農薬成分回数 早生 26 中生 28 晩生 32
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

## 13 ぶどう

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 20%以上低減	化学肥料窒素成分量(kg/10a) ・ピオーネ、巨峰系4倍体品種、2倍体米国系 品種(無核栽培)及び3倍体品種 加温 11 無加温 9 簡易被覆 5 ・シャインマスカット及び2倍体欧州系品種(無 核栽培) 加温 11 無加温 7 簡易被覆 6 ・マスカット・オブ・アレキサンドリア及び有核栽培品種 加温 5 無加温 3
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 5%以上低減	化学合成農薬成分回数 ピオーネ、巨峰系4倍体品種、2倍体米国系 品種(無核栽培)及び3倍体品種 加温 23 無加温 24 簡易被覆 27 ・シャインマスカット及び2倍体欧州系品種(無 核栽培) 加温 24 無加温 25 簡易被覆 29 ・マスカット・オブ・アレキサンドリア及び有核栽培品種 加温 16 無加温 22
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

## 14 みかん

区域名 岡山平野

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・温州 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 9
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・温州 15%以上低減	化学合成農薬成分回数 13
	除草用動物利用		
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

## 15 なし

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 15%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 11
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 15%以上低減	化学合成農薬成分回数 38
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

## 16 キウイフルーツ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 20
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 10
	天然物質由来農薬利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

## 17 いちじく

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 12
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 —	化学合成農薬成分回数 19
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

## 18 うめ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 15
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 15%以上低減	化学合成農薬成分回数 17
	天然物質由来農薬利用		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

## 19 かき

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 25%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 12
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 5%以上低減	化学合成農薬成分回数 15
	天然物質由来農薬利用		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

## 20 ブルーベリー

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	稲ワラ、もみ穀等	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 7
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 25%以上低減	化学合成農薬成分回数 7
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

## 21 くり

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 20
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 10%以上低減	化学合成農薬成分回数 8
	天然物質由来農薬利用		
	マルチ栽培		

## 22 なす

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 共通 ・施設 30%以上低減 ・夏秋 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・施設 60 ・夏秋 55
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・施設 30%以上低減 ・夏秋 10%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・施設 60(うち育苗期4) ・夏秋 23(うち育苗期2)
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

## 23 トマト

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・夏秋 25%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・夏秋 35
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・夏秋 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・夏秋 26(うち育苗期2)
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		



## 24 ほうれんそう

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・冬まき(12月～2月) 25%以上低減 ・その他 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・共通 20
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	生物農薬利用	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・夏まき(6月～8月) 7 ・その他 9
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

## 25 ねぎ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t(青ねぎ1t) (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・小ねぎ 10%以上低減 ・白ねぎ 25%以上低減 ・青ねぎ 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・小ねぎ 25 ・白ねぎ 32 ・青ねぎ 25
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・小ねぎ 25%以上低減 ・白ねぎ 15%以上低減 ・青ねぎ 50%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・小ねぎ 8 ・白ねぎ 24 ・青ねぎ 10
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培(青ねぎを除く)		

## 26 かぶ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・小・中かぶ 12 ・大かぶ 18
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・小・中かぶ 5 ・大かぶ 10
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

## 27 しゅんぎく

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・摘取り 30%以上低減 ・抜取り 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・摘取り 28 ・抜取り 15
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	温湯種子消毒	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・摘取り 10%以上低減 ・抜取り 25%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・摘取り 7 ・抜取り 4
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

## 28 こまつな

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・夏播(6月～8月) 7 ・その他 12
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	生物農薬利用	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・春播(3月～5月) 5 ・夏播(6月～8月) 6 ・秋播(9月～11月) 5 ・冬播(12月～2月) 6
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
フェロモン剤利用			

## 29 みずな

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 15
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	生物農薬利用	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 5
	対抗植物利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

### 30 さんとうさい

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 12
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	生物農薬利用	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 6
	対抗植物利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
フェロモン剤利用			

### 31 チンゲンサイ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 20
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	生物農薬利用	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 6
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

### 32 いちご

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・促成 15%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 30
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	生物農薬利用	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・促成 20%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・促成55(うち育苗期21)
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

### 33 きゅうり

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・夏秋 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・夏秋50
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・夏秋 15%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・夏秋26(うち育苗期3)
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
マルチ栽培			

## 34 キャベツ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・春播まき(2月～4月) 10%以上低減 ・夏播まき(5月～8月) 30%以上低減 ・秋播まき(9月～11月) 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・共通 25
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・春まき(2月～4月) 12 ・夏まき(5月～8月) 13 ・秋まき(9月～11月) 10
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

## 35 はくさい

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・春まき(2月～4月) 35 ・秋まき(7月～9月) 30
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・春まき(2月～4月) 16 ・秋まき(7月～9月) 14
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

### 36 レタス

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・共通 22
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・秋まき(8月～11月) 13 ・冬春まき(12月～2月) 12
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

### 37 だいこん

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・冬春まき(11月～5月) 30%以上低減 ・夏まき(6月～7月) 30%以上低減 ・秋まき(8月～10月) 15%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・冬春まき(11月～5月) 15 ・夏まき(6月～7月) 15 ・秋まき(8月～10月) 18
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	生物農薬利用	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・冬春まき(11月～5月) 5 ・夏まき(6月～7月) 18 ・秋まき(8月～10月) 12
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

## 38 にんじん

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・夏まき 10%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・夏まき 23
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・夏まき 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・夏まき 12
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

## 39 たまねぎ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・普通 10%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・普通 28
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・普通 20%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・普通 18
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		



## 40 かぼちゃ(ソウメンナンキンを含む)

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・普通 15%以上低減 ・早熟 20%以上低減 ・抑制 20%以上低減 ・ミニ 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・普通 25 ・早熟 25 ・抑制 20 ・ミニ 18
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・普通 25%以上低減 ・早熟 15%以上低減 ・抑制 25%以上低減 ・ミニ 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・普通 12 ・早熟 16 ・抑制 12 ・ミニ 22
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

## 41 ピーマン(パプリカ、ジャンボピーマンを含む)

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・夏秋 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・夏秋 35
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・夏秋 15%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・夏秋 育苗 3 ・夏秋 本畑 20
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

## 42 アスパラガス

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり5t (土壌診断に基づく)	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 40
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 19
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

## 43 紅ずいき

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 27
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 5
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

## 44 ブロccoliー

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比	化学肥料窒素成分量 (kg/10a)
	肥効調節型肥料施用	・春まき(2月～3月) 15%以上低減	・春まき(2月～3月) 20
	有機質肥料施用	・夏まき(7月～8月)・秋どり 25%以上低減 ・夏まき(8月～9月)・冬春どり 20%以上低減	・夏まき(7月～8月)・秋どり 23 ・夏まき(8月～9月)・冬春どり 27
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・春まき(2月～3月) 10 ・夏まき(7月～8月)・秋どり 16 ・夏まき(8月～9月)・冬春どり 14
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

## 45 いら

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	・軟化1年目 10a当たり2t (土壌診断に基づく) ・2年目以降 10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比	化学肥料窒素成分量 (kg/10a)
	肥効調節型肥料施用	・軟化1年目 30%以上低減	・軟化1年目 24
	有機質肥料施用	・2年目以降 25%以上低減	・2年目以降 30
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 10%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・軟化1年目 10 ・2年目以降 14
	生物農薬利用		
	土壌還元消毒		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
マルチ栽培			

## 46 とうがん

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 15%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・共通 24
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 10%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・早熟 16 ・普通 14
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

## 47 ズッキーニ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・早熟 10%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・早熟 25
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・早熟 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・早熟 10
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

## 48 バレイシヨ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・春作 5%以上低減 ・秋作 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・春作 15 ・秋作 16
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・共通 10
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

## 49 スイートコーン

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 25%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 27
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 9
	生物農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

## 50 ごぼう

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・露地春まき 30%以上低減 ・秋まきトンネル 5%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・共通 20
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・共通 12
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

## 51 ミニトマト

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 20%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・夏秋 32 ・促成 40
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・夏秋 27(うち育苗期2) ・促成 48(うち育苗期2)
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

## 52 にんにく(ジャンボニンニクを含む)

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり1t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 25%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 25
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 —	化学合成農薬成分回数 20
	生物農薬利用		
	天然物資由来農薬利用		
	土壌還元消毒技術		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

## 53 トレビス

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・夏まき 20 ・春まき 24
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・夏まき 8 ・春まき 6
	生物農薬利用		
	天然物資由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

## 54 さつまいも

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 10
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 50%以上低減	化学合成農薬成分回数 10
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

## 55 さといも

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 25%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 25
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 50%以上低減	化学合成農薬成分回数 12
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		



## 56 しょうが

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素分量 (kg/10a) 35
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 50%以上低減	化学合成農薬成分回数 24
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		

## 57 やまのいも(ツクネイモ、ナガイモ、ジネンジョ含む)

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素分量 慣行比 ・共通 25%以上低減	化学肥料窒素分量 (kg/10a) 40
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 16
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

## 58 すいか

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 22
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 ・共通 慣行比 30%以上 低減	化学合成農薬成分回数 ・露地 18 ・トンネル16
	生物農薬利用		
	対抗植物利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

## 59 セルリー

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 60
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	温湯種子消毒	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 20
	機械除草		
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

## 60 いんげん

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素分量 (kg/10a) 25
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 9
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

## 61 えんどう

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素分量 (kg/10a) 15
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 25%以上低減	化学合成農薬成分回数 16
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

## 62 そらまめ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素分量 (kg/10a) 11
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 13
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

## 63 えだまめ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素分量 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学肥料窒素分量 (kg/10a) 10
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・大豆(黒大豆を除く)9 ・黒大豆12
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

## 64 しそ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	-	-
	緑肥作物利用	-	-
化学肥料低減技術	局所施肥	-	-
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	-	-
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

## 65 オクラ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	-	-
	緑肥作物利用	-	-
化学肥料低減技術	局所施肥	-	-
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	-	-
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

## 66 コウサイタイ

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	-	-
	緑肥作物利用	-	-
化学肥料低減技術	局所施肥	-	-
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	-	-
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

## 67 しろうり

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	-
	緑肥作物利用	全量すき込み	-
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 30
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 13
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
マルチ栽培			

## 68 なばな

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 35
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 10
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

## 69 メロン(トンネル)

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 9
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 16
	生物農薬利用		
	抵抗性品種栽培・台木利用		
	天然物質由来農薬利用		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	マルチ栽培		

## 70 リーフレタス

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
	緑肥作物利用	全量すき込み	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) ・共通 22
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・共通 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 ・秋冬まき 8 ・春まき 6
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		

## 71 れんこん

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 ・30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 54
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 ・50%以上低減	化学合成農薬成分回数 6
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	光利用		
	フェロモン剤利用		



## 72 クレソン

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 30%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 16.8
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	生物農薬利用	化学合成農薬成分回数 慣行比 30%以上低減	化学合成農薬成分回数 3
	天然物質由来農薬利用		
	被覆栽培		

## 73 きく

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 5%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 20
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	機械除草	化学合成農薬成分回数 慣行比 5%以上低減	化学合成農薬成分回数 25
	生物農薬利用		
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
マルチ栽培			

## 74 カーネーション

区域名 岡山平野・吉備高原・津山盆地・中国山地

区分	持続性の高い農業生産方式の内容	使用の目安	慣行レベル(参考)
有機質資材施用技術 (土づくり技術)	堆肥等有機質資材施用	10a当たり2t (土壌診断に基づく)	—
化学肥料低減技術	局所施肥	化学肥料窒素成分量 慣行比 15%以上低減	化学肥料窒素成分量 (kg/10a) 100
	肥効調節型肥料施用		
	有機質肥料施用		
化学農薬低減技術	抵抗性品種栽培・台木利用	化学合成農薬成分回数 慣行比 15%以上低減	化学合成農薬成分回数 39
	天然物質由来農薬利用		
	土壌還元消毒		
	熱利用土壌消毒		
	光利用		
	被覆栽培		
	フェロモン剤利用		
	マルチ栽培		